岡本太郎『明日の神話』広島誘致顛末記（一九五四～二〇〇九）

竹澤雄三

はじめに

二〇〇八年三月十八日、岡本太郎記念現代芸術振興財団は、『明日の神話』が展示されていた東京都現代美術館で「渋谷、吹田、広島の三候補地を検討した結果、『明日の神話』の恒久展示は渋谷にする」と発表した。

吹田市長は「広島ならともかく。なんで渋谷やねん」と呟いたとか。

岡本太郎が制作した大壁画『明日の神話』は、今、渋谷駅の井の頭線、地下鉄銀座線への連絡通路に飾られている。

残念ながら広島が『明日の神話』の恒久展示場とならなかった。だがこの壁画を「広島に！」という市民の声は大きかった。

過去、広島の市民が熱く燃えたのは広島東洋カープの優勝の時である。あのような熱烈、興奮ということではないが、それを彷彿させる、久々の広島の街であった。

岡本太郎『明日の神話』の誘致活動は、被爆地広島に明るい、元気がでる事業として迎えられた。今後の広島のまちづくりへの参考として、ここにその経緯をまとめる。

『明日の神話』には、莫大な核エネルギーが炸裂し、人が炎につつまれ、雄々しく立ち上がっている姿が描かれ、「ヒロシマ・ナガサキ」という副題がついている。

この広島誘致顛末記は、『明日の神話』発想の源である「核」をテーマに岡本太郎が作品を作りだす一九五四年から今日まで五五年の時を顧みることとする。

誘致顛末記を執筆するにあたり、この記述は、あくまでも私を含め広島から見た顛末記である。出来るだけ客観的なデータをもとに記したつもりだ。そうでない点があったらお許し願いたい。

1 岡本太郎・敏子―広島の因縁

(1) 岡本太郎と広島

東京から約八〇〇km西の都市、広島には岡本太郎との縁が思いのほか多くある。岡本太郎の年譜を参考にしながら、時を遡ってみると次のような点が挙げられる。

一九四〇年八月フランスからの引き揚げ船、白山丸で帰国した岡本太郎は、翌年、徴兵検査を受ける。

一九四二年一月、中国大陸へ出兵のため、東京から列車で広島に来る。広島・宇品港から上海に向けて出港した。

一九四六年六月、九州・佐世保に上陸。列車で東京に帰る途中、日本を出た町、広島の惨状を目にしたであろう。

一九四八年、「夜の会」を結成する。メンバーに佐々木基一（文芸評論家、広島県豊田郡本郷（当時）生まれ、本名：永井善次郎）が創立から参加している。（佐々木の姉は、詩人、原民喜夫人。一九四四年に夫人が亡くなったあとも佐々木と原は親しいつき合いをしていたようである。）岡本太郎は同じ、慶応に関係するものとして原が一九五一年、自殺したことや原と同じく広島で被爆した当時人気小説家大田洋子のことも佐々木を通して知ったと推測する。大田洋子が《屍の町》（一九五〇年五月三〇日、冬芽書房）に続く原爆をテーマとする作品《半人間》（一九五四年五月五日、講談社）を出版。岡本太郎がこの本の装丁をしている。これは佐々木が仲立ちしたのではないかと思う。《半人間》は、一九五四年五月五日に発行されている。このことからすると岡本太郎は、マグロ漁船第五福龍丸が焼津に帰港する（9月14日）以前に核兵器による惨状と具体的な状況を知っていた。

岡本太郎は一九五四年に《青空》、一九五五年、『明日の神話』の原型といえる《燃える人》（東京国立近代美術館蔵）、《瞬間》、翌年《死の灰》等の「核」をテーマとする作品を次々と発表している。

一九五九年八月、岡本太郎は広島で開催された「第五回原水爆禁止世界大会」へ参加し、中国新聞社講堂で講演会をした。展覧会「人間の記録」展には《燃える人》を出品している。その後も「原爆慰霊碑碑文論争」、「芸北、備北の花田植と三次人形等の取材」等で広島にしばしば来ている。

(2) 一九六七年の『太陽の塔』と『明日の神話』

ここからは、私の学生時代の話で個人的なこととなることを少しお許し願いたい。

一九六七年十月、私は、大学の同級生で長崎出身の友人とともに南青山の岡本太郎アトリエでアルバイトをした。仕事は『太陽の塔』の模型（70cm大）制作補助であった。岡本太郎は、一九七〇年開催の大阪万国博覧会の仕事で多忙極める時、マミ会館の設計、手の椅

子、アトリエでの絵画制作等の他にメキシコから依頼された大壁画『明日の神話』を併せて制作していたことになる。

私は、この時、はじめて敏子さんに会った。（当時は旧姓の平野敏子）秘書として岡本太郎の動きのすべてを把握し、その仕事を支えていた。その噂にきく女性の姿は、戦いに臨む戦士のようで一直線に岡本太郎を見つめていて、若い学生には「剛い存在」で近寄りがたかった。

アルバイトは模型の完成とともに終わる。約一～二ヶ月間位であったと記憶する。その間、『明日の神話』の気配をアトリエで殆ど感じることはなかった。だがただ一度、トラックに大きな新キャンバスを数枚積み、私らは荷物を押さえる役で荷台に乗り、都内に走ったこと薄々覚えている。

岡本太郎は『太陽の塔』構想下にあっても、メキシコの大仕事、『明日の神話』制作を楽しんでいるのであった。岡本太郎が亡くなった後、敏子さんがよく言っていた言葉「太郎さんは忙しくなればなるほど、どんどん仕事をしたくなる人なの」というのは本当であろう。

南青山のアトリエを後にし、私は、大学に帰った。その後、北海道立近代美術館の学芸員となり、そこで岡本太郎と関り合いのある村上善男氏を知るがアトリエとの直接の縁はなかった。そして二十七年を経て、広島市現代美術館の学芸員としてアトリエを再び訪問することになった。

（3）「広島市現代美術館被爆五〇周年特別企画」と岡本太郎

一九九五年、被爆五〇周年企画として広島市現代美術館は「岡本太郎展」（担当：福永治学芸係長（当時））を計画した。私（当時、学芸課長）は、敏子さんと二十七年ぶりに再会した。（その頃、岡本太郎は公式な場には出なくなっていた。）

戦いに臨む戦士のように剛かった平野敏子さんは、岡本敏子さんとなって、岡本太郎の全てを背負い、表舞台で活動していた。これから「太郎ブーム」を巻き起こさんとする敏子さんは、静かであるが、皆を巻き込む魅力的な力をもつ人にかわっていた。二十七年前、働いていたことを話すと、遠くを見る目をして、納得し、受け入れてくれた。

当時、岡本太郎の主な作品は既に、川崎市に寄贈されていた。川崎市に作品借用を申し込んだところ「まだ川崎市で公開していないので・・・」との理由等でよい返事をもらうことができなかった。だが敏子さんの「けちなことをいわないで協力してあげなさいよ」との言葉で開催が可能になったことを思い出す。

この展覧会は、東京国立近代美術館蔵の《燃える人》も加え、岡本太郎の主要作品を網羅する、久々の公立美術館での岡本太郎展であり、大規模な回顧展となった。企画側の意図は「派手なパフォーマンスで隠されてきた岡本太郎の本当の姿を改めて見つめ直す」展覧会であった。

展覧会開催中、図らずも全国的に注目されるビッグ・ニュースが発生した。

一九九六年一月七日、岡本太郎が亡くなった。各報道機関が大きく取り扱い、美術館にも多くのマスコミ取材が殺到した。回顧展が追悼展になってしまった。

一九九六年六月二六日夕方から、東京・草月会館で「岡本太郎と語る会」（お別れ会）が開かれ約八〇〇人が集った。私が知るところで、勅使河原宏、三宅一生、田中一光、中村メイコ、池部良、瀬戸内寂聴、桜内代議士、藤原雄夫妻等蒼々たるメンバーが集った。この時、敏子さんの計らいで故池田広島市現代美術館長（当時）が来賓挨拶をした。この会場構成、演出をしたのが敏子さんの甥である平野暁臣氏であったと記憶する。岡本太郎と親交があったイサム・ノグチ設計の会場最上部に後ろ姿で返り見ている太郎さんの写真が印象的で、見事な演出であった。

後日、法事の会が新宿で開かれた。この時は、広島市現代美術館もお世話になった筑紫哲也氏も出席していた。

（4）広島での岡本太郎作品展示記録

過去、広島で岡本太郎の作品が展示されたのは、一九五九年八月一日～七日、朝日会館で開催された「日本人の記録」展（朝日新聞社主催）が最初と思える。出品作品は《燃える人》。この展覧会には、鶴岡政男の《重い手》の他、丸木夫妻、土門拳等の作品が展示されている。

一九九五年六月、広島市現代美術館で展示された岡本太郎の最初の作品は「戦後文化の軌跡一九四五―一九九五」展で《重工業》（川崎市教育委員会所蔵）である。同年七月、「ヒロシマ以後」展で《燃える人》（東京国立近代美術館蔵）を展示した。そして同年十一月、前述の「岡本太郎展」と続き、この年は岡本太郎の作品が幾度も広島で見ることができた。

更に、「岡本太郎展」以後、敏子さんに岡本太郎作品を広島市現代美術館に収集したいと申し込んだ結果、彫刻《若い夢》を収集し、一九九八年の新収蔵品展で展示した。その後、大判の版画二点、《坐ることを拒否する椅子》五点を収集。寄託作品と併せると岡本太郎関係機関以外の美術館では国内有数の岡本太郎作品コレクションとなった。

二〇〇一年十一月、「岡本太郎と縄文」展を開催。岡本太郎の作品とともに縄文土器写真も展示。さらに敏子さんに講演をお願いした。

ここまでが岡本太郎作品の広島での主な展示記録である。

2 『明日の神話』

（1）『明日の神話』初情報

二〇〇一年春、名古屋市美術館の「岡本太郎のメキシコ壁画〈明

日の神話〉展」（4/28 ～ 7/8）が開催され、偶然見ることができた。出品作品は、大壁画の最終下絵（一九六七年／油彩・キャンバス、132.5x728.0cm）でメキシコにあったものである。

二〇〇三年七月五日、熊本市現代美術館で敏子さんの講演会があった。講演会が終わると、私が来ることを如何にも知っていたかのように「大切な話があるの！」と敏子さんが声をかけてくれた。美術館の喫茶ルームにふたりは入った。メキシコにある『明日の神話』の作品情報を知らされた。これが広島の者が得た最初の『明日の神話』情報であろう。

「メキシコで太郎さんの『明日の神話』の存在場所がわかった。」「できれば日本に持ってかえりたい。この作品は、原爆をテーマにして描かれている。これを広島に展示することはできないか」「岡本太郎さんの最大傑作よ。名古屋にある下絵でなく、横三〇ｍ縦五ｍの大作でオリジナルよ。」「広島は、太郎さんが亡くなった時、岡本太郎展を開催していた地で、縁が強い。また池田さん（現代美術館長、故人）からも作品を収蔵したいとの強い要望があった。《瞬間》という原爆の炸裂を描いた作品が一番よいかと思ったが、何処にあるのかわからない。他に適当な作品が見つからず残念に思っていた。」人の心をフワッと包み込むような見開いた目と声で話す敏子さんであった。

私は「（広島にとって）凄いことだ。」との直感をたよりに敏子さんに「今は、個人的な意見しか言えないが、これは最大努力する必要があると思う。」と答えた。

二〇〇三年八月七日、東京・南青山の記念館に敏子さんを訪ねる。「近いうちにメキシコへ行って『明日の神話』を確認してくる。」「広島で保管展示してもらうのが最適と思っている。」「メキシコから帰ったら連絡をする。」という話があった。

（2）敏子さん、メキシコで『明日の神話』を確認

二〇〇三年九月、敏子さんはメキシコ・シティー郊外で三〇数年以上行方不明であった『明日の神話』と再会を遂に果たした。「あら！ここに居たのね。」と作品に呼びかけ、大きく手を拡げているシーンの写真が全国報道された。

二〇〇三年八月二九日、ロサンゼルスで日本の新聞（衛星アメリカ版）に「岡本太郎幻の壁画復元へ、愛知万博で展示構想」との記事を見た。敏子さんが言っていたことが本当に始まろうとしているとの実感をもった。広島市に電子メールでこの記事のこととこれまでの経緯を記して送った。

敏子さんは、「岡本太郎は生きている。これから太郎ブームがおきるわよ」と言っていた。私は「不可能と思えることも、実現してしまう不思議な力」を敏子さんに感じていた。

実際、敏子さんは、岡本太郎が亡くなってから岡本太郎の絶版と

なっていた本の復刻、自らの執筆本、それに各地での岡本太郎関係展、敏子さんの講演会も多くなり、「太郎ブーム」は始まっていた。

(3) 広島への打診

二〇〇三年十一月、敏子さんの意向を踏まえてのことと思うが地元テレビ局を介して、報道関係者が広島での『明日の神話』恒久展示の可能性を打診してきた。市関係者にも面会したはずである。ただ行政として、すぐに回答をだすことは当然できず、民間サイドもまだ『明日の神話』のことすらその情報を持たない時期であった。ことが進展するには時間と情報がさらに必要であった。

二〇〇三年十二月二四日、記念館を訪問し、広島の民間サイドで誘致への動きがあることを話した。この頃、修復家の吉村絵美留さんを敏子さんから紹介された。

二〇〇四年二月三日、市内部で「『明日の神話』を是非、広島に置くことを視野に市内の施設を調査して報告する」との意向があることを私から伝えた。

二〇〇四年三月二四日午前、広島市市民局の文化スポーツ部担当と私は、広島市内の施設調査結果をもって東京・青山を訪ねた。市内の施設にこの大壁画を収容できる適当な建物が少なく、その調査内容説明を聞いていた敏子さんは「あなた達は、市内の施設を調べて、その結果、広島は『明日の神話』を受け入れられないと言いに来たの！」と事務的仕事のやり方に厳しい言葉を飛ばしてきた。とっさに私は「広島市現代美術館の回廊に置くことも考えている！」と提案した。実際、現代美術館では、以前から『明日の神話』を現代美術館に置くことを話題にし、検討もしていた。美術館の回廊に設置した場合の想像図を友人に頼み、描いてもらっていた。

後日、私は、岡本敏子さんにその設置案図、考え方（広島市現代美術館の建設趣旨、美術館が原爆ドームへの軸線上に置かれていること等）を説明。だが、私に面と向かっては言わなかったが、丘の上にある美術館ではだめだと思っていたようである。

「いつでも、だれでも、無料で、見ることができる場であることが大切なのよ」と言って、私が「美術館の無料ゾーンに置く計画だから・・・」と言っても、興味を示さなかった。

二〇〇四年十二月五日、広島パルコでの講演会のために来広した岡本敏子さんは、会うなり「『明日の神話』再生プロジェクト事務所を設けたのよ」「メキシコの所有者と値段交渉も好い線になってきた。後は、私が決断するだけなの」「作品の修復作業を公開して、このプロジェクトを盛り上げたい」「広島に展示したい気持ちは変わらずある」「無料ゾーンに置いて、多くの人に自由に見て貰いたい」そして原爆ドーム向いの市民球場前の空間を眺めて「このあたりだったらいいわね」と地元報道関係者に言って、東京に帰った。

その後、壁画の設置場所として確たる案もなしに「こうあったら

いいな！」と思う私案が大穴空間に『明日の神話』を展示する図である。その場所は、敏子さんの言う旧市民球場と電車通りの間か、それとも中央公園あたりを漠然と想定していた。地上に大きな建物を作ることなく、円形劇場の舞台部分に壁画を配し、観客は壁画を見るとともに彼方に原爆ドームを眺める。友人にその構想図を描いてもらった。それにしても具体的な場所を探すことが重要であった。ブレーン・ストーミング的案が続出したが決定打ではなかった。

（4）『明日の神話』再生プロジェクト

『明日の神話』を日本に持ち帰った後、修復する場について色々と検討していることを敏子さんから聞いていた。修復者については、これまで岡本太郎作品を多く手掛けていた吉村絵美留さんが担当することは財団で決まっていたようである。

平野暁臣氏は、岡本敏子さんにかわって実際の交渉、輸送、修復への行程を『明日の神話』再生プロジェクト・エグゼクティブデレクターとしてその任を遂行していた。

メキシコでの作品買い取り交渉では、敏子さんは、神経をとがらせていた。この交渉が行われている頃、地元の新聞記者が現地取材をしようと敏子さんに協力を求めたが、断られている。微妙な時期に騒がしくして欲しくないと言う理由であったようである。

（5）広島の初期民間誘致運動

この頃の広島での民間における誘致運動の中心となる『明日の神話』広島誘致会は、まだなく非営利団体のギャラリーGと地元新聞社関係者が中心に動いていた。

ギャラリーGは、二〇〇五年四月、『明日の神話』展の開催を計画し、岡本太郎記念館から下絵（二〇〇八年、広島市現代美術館に寄託された作品）を借用して、展覧会を開催することに敏子さんも全面協力をしてくれた。そして展覧会オープンには再来広すると約束したのは広島パルコでの講演会を終えて帰京する時であった。私たちは、数ヶ月後の再会を約束して別れた。

二〇〇五年四月一九日、ギャラリーGでの『明日の神話』展は予定どおりオープニングを迎えた。夕方の開会式に来場予定の敏子さんを広島空港にスタッフが迎えに行ったが予定の便で敏子さんは降りてこなかった。広島から東京の自宅に電話を幾度もしたが、だれも電話器をとることはなかった。

広島行きの航空券等、旅準備をそのままに敏子さんは、岡本太郎のもとに逝った。広島市現代美術館での「岡本太郎」展開催中に岡本太郎が亡くなったことを思い出させた。私は、亡くなる数日前に敏子さんと電話で話したのが最後であった。

同年五月八日午後二時から、広島県立美術館地下講堂で予定されていた岡本敏子・山下裕二そして私によるギャラリーGスクールス

ペシャルトーク「岡本太郎とヒロシマ」は急遽、私と山下裕二（明治学院大学教授、広島県呉市出身）の二人で行った。

3　岡本敏子以後

（1）愛媛・東温市での修復作業

メキシコから船で神戸についた壁画の修復作業が松山郊外でおこなわれるということを聞いた。

二〇〇五年八月二九日、財団に許可を得て修復作業を初めて見せてもらう。『明日の神話』との初対面である。修復に詳しい広島市現代美術館学芸員にも同行してもらい、調査をした。

二〇〇五年十二月五日、台の上に伏せてあった壁画をいよいよ立ち上げるとの情報を得て、再び、東温市を訪ねた。

このころ財団から「広島の誘致活動には顔が見えない」とよく言われた。この発言に広島市は敏感に反応し、なんらかの意思表示を財団にしなくてはならないと考えた。

その頃、誘致を掲げた自治体の名前はいくつかあっては消えていた。長崎は、そのうちでも市民活動が活発で、署名活動など具体的な動きをしながら誘致を目指していた。

（2）広島市の意思表示

二〇〇六年春、広島市市民局文化スポーツ部担当と私は、財団理事長（当時、平野繁臣氏）に広島市長の手紙を届けるため財団を訪ねた。記念館隣のビル三階の部屋に通された。敏子さんが住まいとしていた部屋を財団の事務室にリニューアルしたばかりであった。広島市長の手紙を財団理事長に渡した。「これで広島市はエントリーされた」との答えをもらい、帰広した。

（3）『明日の神話』完成への道展

広島市現代美術館での「明日の神話完成への道展」（二〇〇六年四月十五日～五月二八日）は基本的に川崎市岡本太郎美術館で開催された展覧会の巡回であった。ただ広島展では『明日の神話』とほぼ同寸法の超大型写真を会場に設置して『明日の神話』がもつ作品スケールを実感していただくことにした。愛媛・東温市で修復中の「明日の神話」をオーシマ・スタジオ（有）の協力を得て、精密に撮影し、それを大型インクジェッターで二〇数枚のロールに出力し、それを展示室壁に貼付ける。ほぼ同寸法の『明日の神話』を再現した。それが話題になって、美術館は、久々に多くの来館者を迎えた。

関連事業は、二つの講演会を催した。一つは、川崎市岡本太郎美術館長による「岡本太郎の生涯」そして「『明日の神話』再生プロジェクトを語る」と題してこのプロジェクトの統括責任者であり、岡本

太郎記念館長でもある平野暁臣氏がスライドを使って、メキシコからの輸送準備そして愛媛での修復作業までを熱く語ってくれた。この時、『明日の神話』の恒久設置場所選定について一、ストーリー性があること二、自治体とともに多くの市民の支持が強くあること三、いつでもだれでも見ることが出来ること等の条件が最も満たされた場所に展示することになるであろうとの見解を述べた。

市内のギャラリーGでは、企画展「岡本太郎展by日比野克彦」(4/18―5/7)を実施した。この時に「TARO'S PORT HIROSHIMA」のロゴを日比野氏から寄贈され、以後、誘致会のロゴマークとなった。また、八月一日から六日まで「～過去から未来へ～丹下健三広島計画＋岡本太郎『明日の神話』を広島へ」展も開催して、広島への誘致活動を盛り上げた。

(4) 南北軸線上のハノーファー庭園

設置場所に決定打が見いだせないまま、実際に候補になると思える場所を歩き回ってみる。その結果、原爆慰霊碑と原爆ドームを結ぶ軸線上にあるハノーファー庭園付近に空地があって、もっとも現実的で意味ある場のように思えてきた。どこの町も真似できない、広島独自の「場」である。具体的にどのようにしたらいいか、検討を友人と始めた。

「地下空間設置案」がこの場所に設置可能かどうか建築家を含めて検討した。地上レベルから設けられた観覧席を下がっていくと『明日の神話』が地上レベルから約5・5m下げることによって巨大な建物が地上に現われない。また北側区域にある県立体育館のレベルとなる。現在、体育館地域(広島県管理)とこども科学館地域(広島市管理)とは5・5mの高低差がある。壁画設置レベルと体育館レベルが同じになって、通路を設ければ人の流れがスムースになる。都市空間利用にも貢献すると考えた。

だがこの案は、現実的に必要な広さの土地が確保できないとの専門的結論がでた。どうしても地上に建築物を作る案を構築しなければならなくなった。

このハノーファー庭園付近案は、少し奥に入ると言う難点はあるが、球場施設が撤去されたら視界が開けるだろうということと、やはり意味ある場であった。平和公園の背骨軸ともいえる、資料館から原爆慰霊碑、原爆ドームとつながる軸線上に『明日の神話』を配置することが他の都市に真似できないものであり、広島の独自性、そして広島のまちづくりに大きく貢献すると考えた。平和公園の設計をした丹下健三と平和大橋をデザインしたイサム・ノグチは、ともに岡本太郎の盟友である。岡本太郎の代表作を平和公園構想に設置することによって、世界から人が集う平和公園のコンセプトを強固なものにし、魅力を倍増させるという意図があった。

4 『明日の神話』広島誘致会

(1) 市民力と誘致活動

広島誘致の動きは、予てから岡本敏子さんと親交のあったギャラリーGの木村成代さんがNPO法人セトラひろしまに話を持ち込んだことから始まる。

二〇〇六年七月二一日、NPO法人セトラひろしまの理事会で承認され、「岡本太郎『明日の神話』広島誘致準備委員会を発足。事務局はNPO法人セトラひろしまに置くことになった。

二〇〇六年七月二六日、修復作業を終えた『明日の神話』は、東京・汐留の日本テレビ中庭で公開展示された。誘致準備委員会は、この機会を捉えて東京の仲間達と広島誘致のための「東京アクション」を開始した。

東京・渋谷が候補地としてその名前が浮上してきたのがこの頃であった。また吹田市も市長自らが積極的な誘致活動をしていると聞いていた。吹田に加えて東京の自治体の名が出て来ることによって、広島は、危機感を募らせることになった。

だが、「広島はヒロシマ」を訴えるだけ。それも被爆地広島というだけでなく、「人間を考えるヒロシマ」が『明日の神話』とのコラボレーションによって未来の人類のあり方を考えるシステムの構築をしなくてはならないと考えていた。

二〇〇六年十月二七日、肌寒い夜の広島市民球場内で「一〇・二七市民ACT@市民球場」を開催した。『明日の神話』を参加市民が写真片で実物大の写真を完成させるイベントである。参加者：市民約二、〇〇〇人、協力ボランティア一六五人

(2) 広島誘致会発足

二〇〇六年十二月二二日、平和公園内平和文化センター会議室において正式に「岡本太郎『明日の神話』広島誘致会が発足した。会長は、広島青年会議所理事長、副会長は地元各報道機関の長。運営委員長は、中国新聞社副社長の山本一隆、副委員長は、NPO法人セトラひろしまの若狭理事長と木村成代、事務局長は、同じセトラひろしまの副理事長である石丸良道、理事（署名担当）橋本満知子他である。実質、運営委員会が広島市と連絡を取り合いながら『明日の神話』誘致を実施していく体制が民間にできた。

二〇〇七年三月八日、誘致会運営委員長一行が挨拶を兼ねて東京の財団を訪ね、広島誘致への協力を求めた。財団からは「自治体を話し合いの窓口にしている」と回答される。

(3) 基本方針と活動方針「広島はヒロシマ」

誘致会の基本方針、活動方針等は以下のとおり。

〈基本方針〉

1、「岡本太郎」を世界に発信する都市広島。
2、「岡本太郎」を未来につなぐ都市広島。
3、広島には壁画を生かす、優れた環境がある。
4、広島には、『明日の神話』を愛する市民がいる。
5、広島は「困難」を引き受ける覚悟がある。

〈活動方針〉

一九四九年、広島の都市復興計画のもとに丹下健三が担当した広島平和公園構想は、国際平和文化都市広島のまちづくりを意識した東西南北の基軸がある。岡本太郎の壁画『明日の神話』は、広島から発信する平和への祈りであり、あらゆる人々との交流と相互理解の場として機能し、二十一世紀をリードする文化創造の源となるものである。広島での設置場所は、丹下健三が設計した広島平和公園構想の一端に設置することとする。

「人類の良心」といいかえることができる「ヒロシマの心」をもとに「明日への希望」を世界に発信するまちづくりを切実な思いで取り組んでいる広島は、岡本太郎の『明日の神話』展示プロジェクトを推進する。そして以下のことを実現するものである。

〈プロジェクトの使命〉

・『明日の神話』による「ヒロシマの心」の発信。
・『明日の神話』を媒体とした文化創造と発信。
・『明日の神話』による広島のまちづくり

〈活動テーマ〉

・『明日の神話』という「場」の創出（展示施設建設と周辺空間の広場としての整備に関する提案、計画、建設、整備、運用）
・上記事項によって媒介・誘発される諸活動の展開を次の考え方によって展開する。

〈活動展開の考え方〉

・FIELD OF TOMORROWS（明日の広場）を拠点とした文化発信諸活動。
・TARO'S PORT HIROSHIMA（太郎の港）による壁画がもつメッセージを広く世界へ伝播する活動。

（4）「太郎ポート」

広島誘致活動は、広島が壁画を独り占めするのでなく、ヒロシマの心の精神にのっとり、広島を『明日の神話』の母港として、必要とあればどこにでも運び、展示するなど、壁画が持つメッセージを広く伝播するという展開を考えていた。壁画を多くの人が直接見ることができるシステムを作り、そして保存しようというものである。「ヒロシマ」が広島だけのものでないということと同じく、『明日の神話』は人類のものであるということを重要視した。この考えによって『明日の神話』誘致で「設置する場所確保が困難」との理由で撤退した長崎との連携を深めるべきだとの意見があり、広島市長に相

談してみることになった。市長の力で長崎市長と話ができ、実現にむけて動いて、実際、両都市の連携は実現した。

(5) 広島市へ誘致要請―署名活動

東京の財団に対して広島市が正式に誘致の意思を表明してもらうために市民への署名活動は重要であった。

市内で、ことあるごとに『明日の神話』広島誘致のテント小屋、コーナーを設け、街頭等で署名活動を行う。

財団は、誘致交渉の窓口を自治体と位置付け、「民間である任意団体とのコンタクトはしない」という条件をつけていた。そのため、どうしても広島市が主体となり、財団に意志を強く表明してもらう必要があった。『明日の神話』再生プロジェクトへの協力のひとつとしてギャラリーGが中心になり、広島で集めた寄付金約二〇万円を財団に届けたが、東京サイドでは、広島の民間誘致活動は「どこよりも活発であるかもしれないが、それはそれ。あくまでも自治体が表明しない限り、その町が「誘致」を表明したといえない」と広島の自治体からの強い意思表明がないとの見解であった。

街角、祭りや各種イベント会場でのアピールを重ねて集まった数は約三万七千人分(署名活動最終集計分)であった。これは、組織(団体の賛同)票ではなく、広島誘致に賛同する個人の数である。買い物に入った店の主人が「頑張ってくださいね。私もヒバクシャですが、是非、広島に展示してほしい」とか、他の人からは「『明日の神話』はどうなっている」「あれは広島にあるといいね」等々、美術に興味をもっていなかったような人でも話題とする状況が市内に生まれていた。これはうれしい声であり、広島も捨てたものではないと感じた瞬間であった。誘致会は、この賛同者の熱意を背景に数々のイベント、情報発信を予算はともかく制作するよう、良いと思えることは、積極的、敏速に行動した。

加えて展示機能をもつギャラリーGは、スポンサー会社の協賛のもと非営利事業を展開。敏子さんの三回忌である二〇〇七年四月(一七日〜五月六日)、「広島から岡本敏子さんに捧ぐ」と、題して、敏子さんと親交があったMAYAMAXXによる「TARO+TOSHIKO+MAYA MAXX=SUPPEME」を開催。

二〇〇七年五月三日から五日、例年開催される広島、初夏の祭り「フラワー・フェスティバル」において誘致のPR活動を行い合わせて署名活動、折り鶴御輿、明日の神話ぬり絵等を行った。流石、一五〇万人以上の人を集める、ゴールデン・ウイークにおける全国有数のフェスティバルだけあって、署名してくれた数も多かった。五日には、『明日の神話』元安川水面上映会(協力イベント、主催:イマジンプロジェクト)があった。

(6) 一貫した姿勢＝広島は誘致合戦をするつもりはない。

二〇〇七年五月二二日、市長に署名名簿（この時点での数は二七、五〇三名）と要望書を提出した。『明日の神話』誘致の意義、設置場所案、経費（ハノーファー庭園付近に設置する案の概算／民間負担）、今後のスケジュール等具体的な話をする。広島誘致会の基本的精神は、「ヒロシマの心」から発したもので、誘致合戦をするつもりはなかった。これはまったく広島市長が一貫して主張していたことと同じであった。

市長の後、市会議長を訪ね、協力を要請した。

二〇〇七年八月四日、中国新聞紙上に広島鯉城ライオンズクラブがクラブの記念事業として『明日の神話』広島誘致の全面意見広告をだした。誘致活動の意義、基本的考え方、今後の方針等を広く広報するのに効果大であったと思う。この頃から、現在のＦＭちゅーピーが『明日の神話』広島誘致のために特別番組を設けてくれ、会員が交代でほぼ毎週出演し、広報に努めた。

(7) 行政と誘致会

「熱しやすく、冷め難い」誘致会、「（ことに）惚れられない」「熱しにくく、冷めやすい」性格をもつ行政。当初、なかなか歩調をそろえることがむずかしかった。資金はないが、風通しがよく軽快に動く誘致会のペースと異なり、バランスをみて行動をする大組織の行政サイドは、軽はずみに動くことはできないことは理解していた。その立場の違いによるコミュニケーション不足が当初、多々あったのは否めない。だが基本的に誘致への思いは一緒であった。

誘致会は、『明日の神話』を誘致することによって広島がなにをしなければならないのかを考えながら、広島市役所と連絡をできるだけ密にし、広島誘致を目指した。広島は、東京などとちがい巨大な行政組織でなく、また小さくもない。従って、市民サイドとの意思疎通がつけ易い面もあった。目標にたいしてお互いの規則、規約等を飛び越えてでも新しい、また多くの人が賛成するまちづくりに邁進することなしに革新的な仕事はできないであろうと誘致会で愚痴った時もあった。行政がまちづくりをするのでなく、その町の人々とともに歩むなかで行政が得意とする「あらゆる問題点を摘出し、検討し、コンセンサスを築く」能力を多いに発揮してもらうことに期待した。

5　東京・渋谷の誘致表明

(1) 不利情報

以前から「東京が登場すると、資金力、腕力で（地方は）圧倒される」と話していた。

それでも広島は粛々と誘致活動を続けることを確認していた。事

実、東京渋谷の登場以降、「広島不利」情報が舞い込むようになってきた。広島は、誘致活動、考え方、内容において東京と対照的であった。広島の誘致会では、誘致に関わる経費を民間サイドで確保する目安をつけ、準備をしていた。だが、東京と異なり、誘致できるとの決定が無いうちは、その具体的な資金源確保、また募金運動もできないことから、一般市民には、資金確保という点での力強さを感じてもらえなかったかと思う。

この頃から、財団が「リアリティー」という言葉をよく発するようになった。この意味が広島ではよく理解できなかったが、誘致が決定してみたら「こういうことであった」のかと分った。

広島鯉城ライオンズクラブによる広島誘致への意見広告が出される頃、誘致会事務局では、「広島不利」との思いが重くのしかかり、一刻も早い、広島市長による財団への意思表示をしてもらうことが大切とその手だてを探った。その手段として、当時、財団理事長であった与謝野馨氏に直接、会ってもらうことを広島市と検討した。意思表示をしてもらいたいと気が焦った時期である。

二〇〇七年十月十日、東京広島県人会懇親会（東京赤坂グランド・プリンスホテル別館）の県出身在京の政治、経済、文化等の人々約二二〇名の集まりで広島への誘致活動をＰＲした。広島県知事にもその会場で会ってＰＲをすることができた。

しばらくして広島市の財団理事長への意思表示が実現した。

二〇〇七年十二月十三日、財団は広島市、吹田、渋谷の三自治体から『明日の神話』設置場所を選考すると発表した。

だがいつ現地視察が行われ、どういったメンバーなのかもはっきりしない、もんもんとする状態が続いた。現地視察が年明けに行われるらしいとの情報があったのは、年末ぎりぎりになってからである。誘致会は、具体的な説明ができる材料として建物案模型を作りたく、忙しくしている建築事務所に無理をお願いしていた。そして年明け早々に視察があるとわかった。

説明は「自治体がすること」が財団からの条件であった。広島誘致会は、説明会に同席させてもらいたいとの意向を広島市と財団に提示した。財団は当初、民間の同席は認められないとの回答をしてきた。しばらくして「自治体が認める誘致団体なら同席して結構」との見解を示した。それを広島市に伝えた。広島誘致会を広島市がパートナーとして認め、説明会への出席に合意した。『明日の神話』広島誘致会が正式に広島市とともに誘致活動をする団体であることになった。

二〇〇七年一月七日、財団の二人が大阪を経由して午後、来広。広島市役所十四階の会議室で担当による説明会がまず開かれ、誘致会からは運営委員長が同席した。広島市長は挨拶をしてすぐに退室する予定であったが、予定の時間を超えて「広島誘致」を力説した。

建物模型は、市民局が用意したものでないためか手順が合わず、

模型を提示しないと言っていたが、誘致会が会議室に用意していたことにより結果的に具体的で有効な説明手段のひとつとなった。また視察のために正月休みを返上して急遽、用意した設置予想写真パンフレットを準備し、『明日の神話』実物大（部分）の写真パネルを旧市民球場入り口に設置を行う。ハノーファー庭園の予定地に誘致活動用幟をたて、具体的な建物のスケールを提示した。急遽の用意であった。

6　アフター『明日の神話』

（1）ラストスパート・アクション

財団による現地調査が終わったが、こんどは次の選考委員会はいつ行われるのかなかなか情報がない。ともかくラストスパートの行動をおこすこととした。

二〇〇八年二月八日、ラストパートアクション―説明と意見交換会「いま私たちにできること！」を市内ホテル二十三階で開催。若者たちで自主構成したTARO'S CAFÉ HIROSHIMAが参加、意見発表をする。自主的に誘致活動に参加する若者グループの誕生であった。

二〇〇八年二月十五日、長崎市が広島市の『明日の神話』誘致趣旨に賛同し、応援する旨の手紙を財団に送付した（前述、市長側の行動成果である）。

四月までの展示といっていた東京都現代美術館での『明日の神話』展示期間が六月まで延びたとの情報がはいり、「広島不利」の想いをつよくした。なぜなら渋谷関係者が六月になったら駅コンコースの壁画展示準備を完成させることができるといっていたからである。ただ「まさか!?」と半信半疑で受け止めていた。

誘致の想いを端的に感じさせる財団への提出資料において、渋谷と広島ではその量において極端な差があるとの意見があり、少しでも改良すべく、パンフレット制作に急いだ。デザイン、投稿、編集等、制作にかかわるものは殆どがボランティアと個人協賛であった。

この時、関係行政部門は、「この場に至って、財団に迷惑をかけたくない。煩わせて悪印象が生じてはいけない」と、このパンフレット製作と発送に消極的であった。誘致会は製作したパンフレットを自ら財団に送付することができず、広島市から署名規模をしめす写真資料と併せて財団に送ってくれるよう依頼した。

二〇〇八年二月十九日、財団選考委員会のプレゼンテーション資料を広島市経由で送付する。これ以前に広島市は正式に誘致する手紙を財団に送付。

二〇〇八年二月二〇日、広島市議会本会議で『明日の神話』誘致がとりあげられる。

二〇〇八年二月二八日、地元新聞朝刊に広島誘致ＰＲ広告が大々

的に掲載される。

二〇〇八年三月、広島市内、八丁堀の大型ビジョンでＰＲをした。

(2) 渋谷に決定後

『明日の神話』広島誘致会は過去約一年間にわたって岡本太郎の大壁画の誘致を行ってきた。多くの人の気持とエネルギーが結集したが広島に大壁画は来なかった。

後日、平野暁臣氏が広島に来て、選考経緯の説明をした。その説明内容について、当日、私は、広島に居なく、後日、風評として聞いただけなのでここでは記述しない。なお『明日の神話』誘致に尽力した広島に感謝して、大壁画に代わるものを広島に提供したいとの提案があったと聞いた。

(3) 反省

はじめから最後まで、財団からの情報収集不足があって、暗中模索で、勢いで奔り続けた感がある。他候補地がどうだったかは分らないが財団とのコミュニケーションがもっととれていれば余分なエネルギーをつぎ込むこともなかったであろうし、最後まで詰めることができなかった著作権や展示関係の問題等々の検討課題も納得して誘致活動ができたであろう。また時代の変化に敏感な対応ができていなかったという反省もある。

(4) 終わって

東京に決まった直後、東京都現代美術館の『明日の神話』、そして今、渋谷駅に展示してある大壁画を訪ねた。三都市を巻き込んだ誘致運動が終わり、壁画は愛媛で見たように静かに大きな図体を横たえていた。渋谷では、本当に沢山の人が壁画の前を通り過ぎていた。人の波は、怒濤のように流れが過ぎるといったん人は少なくなる。その繰り返しで、人が少ない時、立ち止まって壁画を眺める人の姿がある。そしてまた怒濤のような流れが押し寄せてくる空間であった。そこには生前、岡本太郎のパフォーマンスの影もこの作品を説明するキャプションや説明板等もない。作品そのものだけが輝いて見えた。ただ作品保存はどこの地にあっても大変であろうと感じた。これだけ大きなそして重量物であるせいか継ぎ合わされ修復されたところが離れてきていると思われる亀裂を観察した。

だが岡本太郎の研究は、この誘致騒ぎをよそにこれからも粛々と進められなくてはならないと改めて壁画の前で思った。

7 誘致会解散とその後

(1) 解散式

広島県立美術館講堂で誘致会総会を開き、誘致会の決算報告と誘致会の解散を決めた。これまで多くの市民の皆様から頂いた寄付金

（誘致会の活動資金として）についても監査報告に基づく手続きを終えた。

総会の後、広島がやるべきことについて、明日への提案とシンポジウムが開かれ、会場からも有意義な提案が多くあった。

シンポジウム内容

開催日時：二〇〇八年四月二六日（土）一四：三〇～一七：三〇

場　所：広島県立美術館講堂

テーマ：「何をもたらしたのか？何をもたらすのだろうか？今、情熱をもって明日を語る！」

参加者数：九六名

内　容：挨拶　誘致会会長（社団法人広島青年会議所理事長）丸岡賢之

挨拶　秋葉忠利広島市長

・第一部　活動リレー報告：岡本太郎『明日の神話』広島誘致市民活動を振り返って　報告者：木村成代、橋本満知子、石丸良道

・第二部　『明日の広場』創造に向けて　提案者：竹澤雄三

・第三部　シンポジウム PASSION FOR TOMORROW「しゃべくり場」明日の文化とは？どうなる広島のまちづくり？―市民によるフリー討論

■　岡本太郎『明日の神話』広島誘致会・解散式と懇親パーティー

・同日一八：〇〇～二〇：〇〇　ギャラリーGとその前庭

参加者：一二〇名

・解散式挨拶　山本一隆誘致会運営委員長

・司　会：松田　弘（現、広島県立美術館学芸課長）

（参考）

○　広報活動のための主な制作物

・活動パンフレット（四万枚）、署名カード

・アピールパンフレット（五千枚）

・B3ポスター（五百枚）

・『明日の神話』シール

・オリジナルキャップ

・PR用のぼり

・『明日の神話』ぬり絵

・大型ビジョン用PR映像

・ホームページ開設と運用

・活動協力に対するお礼広告（中国新聞紙上）

○　会員

・会員数　個人会員二七三名　法人会員九法人

○　寄せられた賛同署名数（広島市長宛）三七、〇三五名

○ サポーター一八名

石原慎太郎（東京都知事）MAYA MAXX（画家）赤穴宏（画家）赤瀬川原平（作家）伊東豊雄（建築家）田沼武能（写真家）小林裕児（画家）松永真（グラフィックデザイナー）篠原有司男（アーテスト）佐々木典夫（「劇団四季」代表取締役社長）平幹二郎（俳優）吉川晃司（歌手）コシノジュンコ（ファッションデザイナー）坂倉竹之助（建築家）＊順不同、敬称略

○ SPECIAL THNKS

広島市、広島市平和文化センター、東京広島県人会、広島鯉城ライオンズクラブ、岡本太郎『明日の神話』長崎誘致連絡協議会、広島青年会議所、FMひろしまPステーション（現：FMちゅーピー）、ギャラリーG、他多くのマスコミ関係者およびご協力いただいた法人、個人の方々。

（2）『明日の神話』（下絵）、広島に寄託

二〇〇八年六月六日、広島市現代美術館に『明日の神話』下絵（岡本太郎記念館蔵）が寄託されることになった。その引き渡し式が平野暁臣岡本太郎記念館長、広島市長が列席して美術館で行われたとの新聞報道があった。

おわりに

元広島県立大学学長の今堀誠二氏が「広島には、日本一、世界一の何かが必要だ」と広島市現代美術館開設準備委員会で発言されたことがある。二十数年前のことである。

広島市民がなぜ『明日の神話』に強い興味をしめしたのか。それは『明日の神話』が原爆をテーマとする作品でありながらも底抜けな前向き姿勢、でっかく分りやすい絵のストーリー、そして著名な家族をもつ有名作家、加えて作家と広島の因縁、そして「なにものにも負けないという不屈の精神、を描いていること」が広島の多くの人に受け入れられたように思う。

誘致会は発展的解散をした。そして誕生したのが『広島文化会議』（仮称）である。将来、『明日の神話』を設置しようとした旧広島市民球場に『明日の広場』（仮称）を建設し、四年～五年に一度の国際展、年度では野外コンサート、神楽、サーカスなどを催す市民の広場を構築したいと、今、夢を語っている。準備段階の事業としては映画「ヒロシマ・モナムール」（日本タイトル「二十四時間の情事」）上映五〇周年の記念事業、イサム・ノグチの萬来舎と平和大橋に関する展覧会を開催した。

あの日、一瞬にして破壊した広島の文化、そのまちづくりに『明日の神話』を誘致しようとした。だが広島のまちは『明日の神話』だけから生まれるものではない。シンポジウムで発言に、「優れた

芸術を広島は求めている」と言った参加者がいた。多くの世界の優れた芸術家が心を寄せてくれている広島の「文化形成」に誘致会は形をかえて動き出そうとしている。

広島には数多くの世界的芸術家が「ヒロシマの心」に思いをよせてくれている。またこの『明日の神話』広島誘致に賛成でないと真正面から真剣に異議を唱えてくれる方もいた。この意見は、誘致活動を推進する上でいつも頭の隅に存在し、指針ともなった。「ヒロシマ」を思う世界の心は健在である。

市民力の漲る運動から本当の「広島・ひろしま・ヒロシマ・HIROSHIMA」を誕生させたいものである。多くの方々の参加とご意見によって世界に誇れる広島のまちづくりが出来ることを願っている。

感謝

広島誘致会は短い間の活動でした。具体的に名前を挙げませんが大変多くの方々に支えられて動くことができたことを深く感謝し、厚く御礼申し上げます。

岡本太郎記念振興財団にも深く御礼申し上げ、これからも益々、岡本太郎の業績、太郎・敏子のふたりが輝くことを祈ります。

竹澤雄三（たけざわ　ゆうそう／前広島市現代美術館副館長、『明日の神話』広島誘致会運営副委員長）